

「まちのトレジャーハンティング@そうか」を開催しました。

開催日：平成28年6月25日(土)・26日(日)

場 所：草加市立草加小学校体育館他



「まちのトレジャーハンティング@そうか」は、普段まちの人たちが気づいていない空間資源、地域資源、歴史的資源などのまちに存在する潜在的な価値のある“お宝”を、4人のトレジャーハンターたちがまちの人たちの一緒に探し使い方を考えることで、草加市の未来と豊かな暮らしをまちの人たちと一緒に考え構想するものです。

平成27年度より、空き店舗や空き家といった遊休不動産に新たな機能や付加価値を加え、カフェやモノづくり工房、創業支援施設など、新しいビジネスや交流の場を創造し、雇用の創出を図るリノベーションまちづくりの取組の一環として平成28年6月25日(土)・26日(日)の2日間にわたり開催されました。

(報告会・トークライブの様子は <https://youtu.be/bC4GzXLZ0Xw> にアクセスいただくとご覧になります。)



(1日目の様子)



開校式ではトレジャーハンターの1人青木純さんから35名の参加者に対し、「どうすれば草加でたのしく暮らしてつづけられるか?」、「一見ダメなものに価値を見出す」、「ないものは、ない。ないことを前向きにとらえてみよう」、「今、あるものを活かして新しいまちの使い方を提案しよう」などの話があり、トレジャーハンティングへの意気込みを共有しました。



開校式の後には、各ユニットに分かれて、まちの中に繰り出しました。エリアは松原団地西エリア、松原団地東エリア、草加駅西エリア、草加駅東エリアの4つ。それぞれのユニットとも、まちを歩くだけでなく、そこに住む人たちから話を聞くなど、積極的にまちの資源(お宝)を探しました。



まち歩きの後には、見つけた資源を「どのように使えば暮らしが豊かになるか」ということを徹底的に考えました。各ユニットのワークショップは26日(日)に開催される報告会に向けて、オープニングパーティの後にも再開し、夜遅くまで終わることがありませんでした。



(2日目の様子)

26日(日)の「まちのトレジャーハンティング@そうか 報告会」には、多くの方が来場し、笑いあり、夢ありの各ユニットが構想した草加の未来の豊かな暮らしの提案に耳を傾けていました。



ユニットAは松原団地駅西エリア。ユニットAはエリアの現状を分析したうえで、“まちの骨格、座標に注目”をしました。車が走るだけの大きな道路だけでなく、“水路”や“路地”をお宝として捉えて、表通りの車だけでなく、裏通りの人に着眼して庭先コミュニケーションを生む、「水路地～The 庭先ネットワーク」という提案がなされました。住宅地の中に張り巡らされている水路や路地を活用することで、エリアでの豊かな暮らしを創出するアイデアも披露されました。イタリアのナヴィリオ地区を事例に、住民が夜の水辺を活かすことも提案されました。



ユニットBは松原団地駅東エリア。エリアの問題点として、「3つの断絶」があるとし、具体的には“川”、“世代”、“男女”における断絶があるとしていました。その断絶の背景にはベッドタウン問題も関係すると分析し、それを解消するために、男性が活躍できる場を創りだそうとする「プロジェクトN」という提案でした。綾瀬川や左岸広場などの資源を活用して、男性が活躍できる場を用意することで、3つの断絶を解消しようとするコンセプトの提案でした。



ユニットCは草加駅西エリア。ユニットCが見つけた宝は“そこに暮らす人”と“街中に散在する農地”。体験型農業をライフスタイルを変えるためのコンテンツとする“Co-farming Co-vegetable”という提案を行いました。野菜を作り、野菜を消費するということを共にやっていこうということをコンセプトにされていました。作った野菜をすべて自分で消費することは難しいので、余分をコミュニティでシェアできるマーケットを構築することで若者を呼び込むことができるというものでした。さらには、有り余る空間資源を、一例では畑として活用することにより、人が集まれる空間となり、かつてのにぎわいを取り戻すと同時に、周辺に開業した飲食店で採れた野菜を使うことで新たなコミュニティの創出にもつながるというものでした。



ユニットDは草加駅東エリア。様々な問題点を、「血液の循環がされていない代謝の悪いまち」と表現した上で、そのために見つけた宝である“川”、“細道”、“奥にひそむ人”を通じて、「そこから醸し出される未体験の深み」の世界を生み出すという提案でした。まちの入り口を川にする、賑わいを日光街道から細道へ、コミュニケーションある楽しいまちといったように3つの宝である川を動脈、細道を毛細血管、人を血液に見立てることで、提案によって草加の血流を促すことを目指すというものでした。さらには使われていない公共施設などの空間資源の活用や、車が走れない細道は子どもの安全な遊び場になるなどの提案もなされました。

各ユニットからの発表の後にはユニットマスターとサブユニットマスターによる車座になって膝を付けて合せての大喜利トークバトル。お互いのユニットの発表について意見をぶつけ合いました。



それぞれのユニットからの提案について質問や具体性、実現性について率直に語り合いました。ベッドタウンという一面がまちを特徴のないものになっているということを問題として捉えつつも、獨協大学や伝右川や綾瀬川といった水辺空間という資源についても触れられました。

東京へのアクセスの良さにも注目され、桜並木や松並木、旧町の古き良き雰囲気や外国人に発信することの重要性も意見として挙げられました。その中で、あらためて細道の素晴らしさ、寛容さを実感し、その細道を空間資源として、せんべいやお酒というコンテンツを増やしていくことがまちを変えることにつながるのではないかという意見も出ました。

郊外住宅地では、女性はまちの中で生活しているので、女性はコミュニティや友達がいるが、男性は夜しかいないので、普段の暮らしにおいては男性の存在感が薄くなってしまっており、まちづくりにおいては、男性の活躍の場を作る必要があるとの考えも、ベッドタウンの新たな問題点として提示されました。そのために、まずは今ある公共空間資源をいかに活用するかということを実際に考えてもらいたいという行政への要望も出ました。

サブユニットマスターからは、「もっと若い男性が遊べるまちにしたい」、「子どもができてまちづくりに関心を持ち始めて自分で活動を始めたが、トレハンを通じてパパに活躍の場を作ることも大切だと感じた」、「寛容さや、許容ができるまちにしたい」、「まったく違うまちの人との交流は衝撃的で、未来ある二日間でした」との意見で大喜利が締めくくられました。



報告会の後には、「さようなら『ベッドタウン』～寝だけのまちから、住んで働いて暮らすまちへ～」と題し、各地でリノベーションまちづくりを実践する専門家が、各ユニットからの提案を受けつつ、本市の未来や豊かな暮らしについてのトークライブを開催しました。

それぞれのユニットの意見や都市経営的な観点からの意見や感想として、安井さんからは横のつながりを具現化していくこと、都市農業や細道といったポテンシャルをもっと引き出すべきと意見があり、桑原さんからは飲食店を経営されている視点から、市内の地産地消や路地活用の可能性についての指摘があり、清水さんからは草加市には空間資



源やコンテンツがあるということはわかったが、それらをうまくまちなかで表現されていないという印象を受けたとのことでした。

ひとつめのテーマとされたのは都市農業と飲食。日本人の健康に対する意識の向上に対して、それを飲食店としてまちなかで表現されていることが東京でも地方でも多くなっているという実情があり、生産現場と消費者の口を直接つなげることで、都市農業の新たな可能性が見えてくるのではないかという話がありました。さらには都市農業においては、農業の生産物としての野菜を生産者と消費者を結ぶということだけでなく、さらには地域の子どもをも巻き込み食育という観点からも、草加市における都市農業が果たす役割を見出していくことも考えるのではないかとこの意見も出ました。収益という観点でも農業者が農業によってだけでなく、教育者という立場にも立ちつつ、農地を児童や保護者に貸し出すオーナー制度をビジネスとするという斬新なアイデアも披露されました。農産物には鮮度ということがもっとも重要であり、草加市は消費地から近いということも十分な強みとなることも意見として出されました。



さらには、大企業における在宅ワークや兼業が認められるといった近年の動きの中で、飲食店は地域に開かれる公共空間となりうるのではないかという、時代の先を見た意見もありました。嶋田さんからは『農業は食のDIY』というキャッチフレーズも飛び出しました。農業の食のポテンシャルを発揮させることで、さらには社会保障費が減少



するという都市経営課題の解決にもつながるとの発展的な意見もありました。

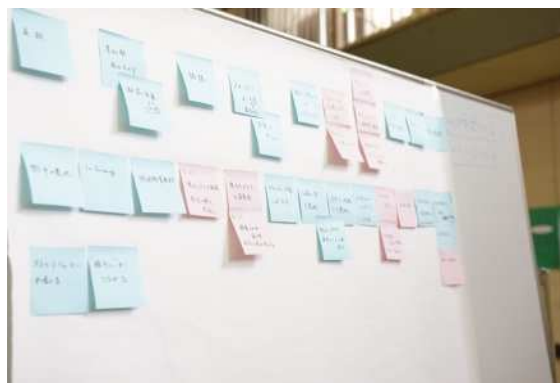
二つ目のテーマとしては、公共施設の利用の仕方が話されました。公共施設の活用にはパブリックマインドを持った民間組織、PPPエージェントを活用することを考えた方がいいのではないかという提案がされました。PPPエージェントとは公共施設の維持管理と利活用において最適解を生み出す組織であり、現状を打破するためには、草加市には欠かせない存在ではないかという意見がありました。

最後に主催者を代表して、草加市副市長が、二日間、草加市のことを真剣に考えていただいた参加者の皆様、また運営に携わったボランティアの皆様への感謝と共にあいさつをしました。



「草加に住む市民の皆様が、草加に住むことで得られる充実感など、寝るだけのまちではなく、仕事をしたり、家族と過ごしたり、生活の舞台として暮らすことのできるまちを、市民の皆様だけでなく、外から見ていただいている方とも連携も深めつつ、協力して実現させていきたい」とのあいさつがありました。

参加者の皆様、草加のために過ごした長くて熱いあつという間の2日間。本当にお疲れ様でした。





今回の「まちのトレジャーハンティング@そうか」には、獨協大学の米山教授及び日本工業大学の佐々木准教授にご協力いただき、受講生3名(獨協大学1名、日本工業大学2名)をはじめ、多くの学生の皆様にボランティアスタッフとして参加していただきました。期間中の学生の皆様の活躍ぶりには目を見張るものがあり、成功の陰には、学生の皆様の献身的な活躍があったことも忘れてはいけません。「まちのトレジャーハンティング@そうか」に関わったことをきっかけに、草加のまちに、まちづくり、学生の皆様が関心を持ってもらえれば幸いです。学生の皆様、本当にありがとうございました。

